



## めぐりあい

野口 博光  
のぐち皮膚科

1990年に防衛医科大学校(以下、防衛医大)を卒業し、陸上自衛隊医官として14年間勤務して2004年、39歳のときにのぐち皮膚科を開業しました。熊本県上益城郡嘉島町は私の故郷である熊本の市街地から南に15 kmの距離にあり、患者の7割は農村部や山間部から来院されます。

ニーチェの言葉「足下を掘れ、そこに泉あり」は、価値あるものは自分の身近なところにあることを意味します。この言葉が私の座右の銘になったきっかけは、研修医時代の経験にあります。防衛医大は総合臨床医を養育する教育機関なので、皮膚科研修ができるのは2年間のみでした。私は当時講師だった比留間政太郎先生の弟子になりました。先生は早朝に出勤され、毎朝一緒に病棟を回診しました。「外来では同じ患者を1カ月に1回しか診察できないが、治療経過が毎日観察できる病棟での経験は大切だ」と教わりました。外来の診察室も先生の隣のブースでした。「患者と無駄話ばかりして検査データを取り忘れている」と叱られました。欠損データを埋めるために患者の自宅に電話をし、連絡ができない場合は書状を送りました。医局の机も先生のすぐ横でした。机の上にカメラを置いたまま外勤にでかけたときには「外勤先は珍しい症例をみつけるチャンスです」と注意されました。確かに千葉県野田市の病院で非定型抗酸菌症、埼玉県川越市の病院でスポロトリコーシスの症例に遭遇しました。机の

上を片付けていないと「小さくても机を与えられることに感謝しなさい」とまたもや叱責されました。岐阜や長野の日本医真菌学会総会、アデレードやボストンの国際学会に同伴させていただき発表をさせてもらいました。診療がそのまま勉強になる幸せを実感するようになりました。

比留間先生は2013年にお茶の水真菌アレルギー研究所を開設され、現在も研究・教育を継続されています。私も順天堂大学の木村有太子先生とともに研究員になりました。2016年から名誉研究員の松本忠彦先生にも指導をいただいています。松本先生は九州大学、米国疾病予防管理センター(CDC)などで医真菌学を研究された英語的教養のある皮膚科学者で、論理構成と言語表現に博識で、「Serendipity」(思わぬものを偶然に発見すること)という言葉も教えていただきました。両先生のご指導のもとで最近5年間に日本語論文6篇、英語論文36篇を報告しました。また日々の診療からまれな真菌症に遭遇し、さらに人との貴重な出会いにつながりました。

大学でのキャリア不足を認める開業医ですが、比留間先生や松本先生の指導を受けて講演や原稿の依頼を受けるまでになりました。過去に満足せず、さらに勉強を続けたいと思います。